

日本経済新聞

成人のがんと異なる小児がん 治癒率高め、課題は後遺症。



9月は「世界小児がん啓発月間」です。

小児がんは15歳未満の子どもに発症する悪性腫瘍で、日本では年間約2500人が新たに診断されています。毎年100万人近くの成人のがんと診断されていますから、小児がんは大人の400分の1に過ぎず、「希少がん」に分類されます。

男子にやや多く、0～4歳が一番多いです。がんの種類は大人のがんと大きく異なり、白血病が小児がん全体の3割強で最も多く、脳腫瘍が3割弱、悪性リンパ腫が1割を占めます。続く「神経芽細胞腫」(6%)は自然退縮も珍しくありません。

小児がんは大人と異なり、生活習慣は関係しません。遺伝的要素もありますが、原因不明のものも多く、早期発見は困難です。

それでも、大人のがんに比べてがん剤や放射線治療の効果が高く、白血病や悪性リンパ腫の5年生存率は9割前後、小児がん全体の治癒率は7～8割と、大人のがんの6割を上回ります。

他方、成長期にある子どもの体は細胞分裂が大人より盛んです。抗がん剤や放射線治療は、がん細胞以外に細胞分裂が盛んな細胞にもダメージを与えやすいため、治療後の後遺症が問題になります。小児がんサバイバーの半数近くに低身長や不妊、学習障害などの「晩期合併症」が見られます。

さらに、放射線や抗がん剤が原因で、数年～数十年後に別のがんが発生する「二次発がん」の問題もあります。ダイバーシティが叫ばれるなか、小児がんサバイバーが活躍できる環境の整備が必要だと思います。

皆様は「ゴールドリボン」をご存じでしょうか。乳がん患者支援のピンクリボンほど有名ではありませんが、小児がんの子どもたちを支える活動のシンボルマークです。

アフラック生命保険はがん保険の草分けとして、ゴールドリボン活動を支援してきたといいます。小児がん経験者向けの奨学金制度やペアレンツハウス(小児がんの家族向けの宿泊施設)の運営など、がんの子どもとその家族に向けて幅広いサポートを続けており、頭が下がります。

子どもが小児がん罹患(りかん)した場合の経済的負担に備える新しい保険(ミライトキッズ)も同社は販売しています。小児がんは親の仕事や生活にも大きな影響を与えます。子どもが小児がんと診断された時に、一時金が支給される点も安心材料でしょう。

がんの子どもとその家族には、治療以外にも、経済的、心理的な負担が重くのしかかります。少子化が進むなか、社会全体でサポートする体制が必要でしょう。

2025年9月3日